不登校

不登校

不登校

不登校

不登校

あなたは、
この言葉を
本当に知っていますか？

・話を聞いてくれてありがとう。この言葉は、不登校を取材している中で耳にした一人の市民の言葉です。

不登校の子は学校社会の中では少数派です。文部省が不登校の子を無理に学校へ通わさなくてもいいという方針を示しましたが、少数派の存在は大人たちから見ると、《社会問題》《特別なもの》としてくくられる傾向にあります。しかし、本当に社会問題なのでしょうか。不登校の子の存在は特別なものなのでしょうか。

今号では、不登校が話せる人の声を中心に、真っ白な気持ちになって不登校を考えてみたいと思います。不登校とは……。

※本文中の実名、学校名の掲載は控えさせていただきました。写真と本文とは関係ありません。

市内の不登校の子の数は91名 不登校になるきっかけは……

平成9年度市内の不登校児童・生徒数
（調査期間：H9.4.1～12.31）

	不登校の児童・生徒数	男女別 男	男女別 女
小学校	24名（0.54%）	9名	15名
中学校	67名（2.62%）	30名	37名

※（ ）内は、市内全児童および生徒数に占める不登校の子の割合。
※不登校の児童・生徒数は、調査期間内に30日以上欠席した子どもの数。

市内の不登校の子 小・中学校で91名

新津市の不登校の児童および生徒の数は上の表のとおりです。不登校の子の数は小学校で二十四名、中学校で六十七名を数え、全児童および生徒数に占める不登校の子の割合は小学校で〇・五四％（全国〇・二四％）、中学校で二・六二％（全国一・六四％）となっています。

全国的に見ても、不登校は小学六年から中学一年、中学一年から二年へと進む段階で急激に増えます。

一つには特定できない 不登校になるきっかけ

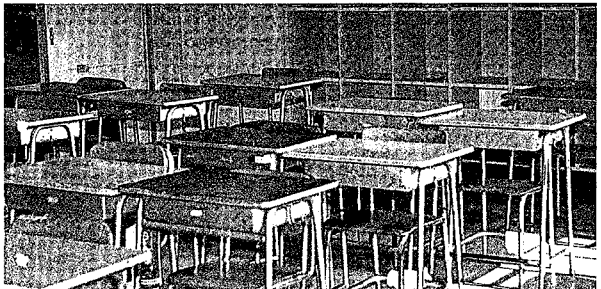
下の表は、不登校になったきっかけを一つだけ挙げてもらった結果を示すものです。

小学生では「本人の問題」が一番多く三六％。次に「家庭生活での影響」（二七・五％）となっています。一方、中学生では「学校生活での影響」が一番多く四一・四％。次に「本人の問題」（三二％）となっています。ただ、不登校になる（なった）きっかけは"これだ"と特定することは難しく、学校や家庭、社会が複雑に絡み合って起きているのが現状です。

不登校になったきっかけ
～文部省の1996年度問題行動白書より～

	学校生活	家庭生活	本人の問題	その他
小学生	23.8%	27.5%	36.0%	12.7%
中学生	41.4%	18.5%	32.0%	8.1%

・学校生活は友人関係や教師との関係、学業の不振などが含まれます。
・家庭生活は家庭の生活環境の急激な変化や親子関係、家庭内の不和などが含まれます。
・本人の問題は病気による欠席や極度の不安・緊張、無気力など、直接のきっかけとなる事柄が見当たらないものが含まれます。

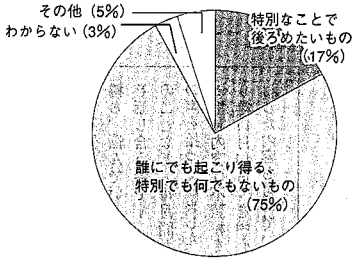


子どもが不登校になるのでは 47％の親が心配を抱く

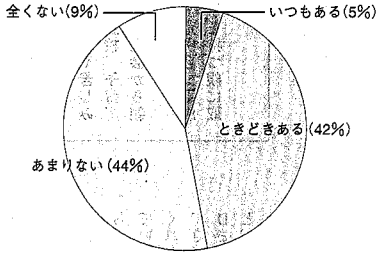
子どもが学校に通っている親は、不登校に対してどんな意識を持っているのでしょうか。親の声（父親または母親）を聞いてみました。

不登校アンケート
◇調査対象
小・中学校に通っている子どもがいる父母100名
◇調査期間
10月14日～11月14日
◇調査方法
無記名方式の郵送法
◇回答率　75％

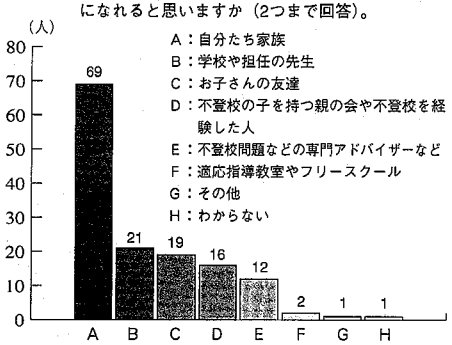
グラフ1　●子どもの不登校というと、親としてどんな第一印象を受けますか。



グラフ2　●自分の子どもが不登校になると思ったり、心配したりすることがありますか。



グラフ3　●子どもが不登校になったら、誰が一番力になれると思いますか（2つまで回答）。



不登校は特別でない 誰にでも起こるもの

グラフ1は「子どもの不登校というと、親としてどんな第一印象を受けるかどうか」を尋ねたものです。

一番多かったのは「今の社会や子どもを取り巻く環境を考えると、誰にでも起こり得る、特別でもなんでもないもの」で75％。「子どもの将来や義務教育、周囲の目を考えると特別なことであり、後ろめたさを感じるもの」と答えた人は17％となっています。

子どもの不登校を心配する親が47％

グラフ2は「自分の子どもが不登校になると思ったり、心配したりすることがあるかどうか」を尋ねたものです。

「いつもある」「ときどきある」とを合わせると、47％の親が毎日の生活の中で、《子どもが不登校になるのでは》という気持ちがあることが分かります。そして、「全くない」と答えた人は9％でした。

また、グラフ1で「子どもの不登校は特別なことであり、後ろめたさを感じるもの」と答えた人（13名）のうち、7名の親は「いつもある」「ときどきある」と答えています。

次に、グラフ3は「子どもが不登校になったら、誰が一番力になれるかどうか」を尋ねたものです。「家族」が一番多く（69名）、次に「学校や担任の先生」（21名）、「お子さんの友達」（19名）、「不登校の子を持つ親の会や不登校を経験した人など」（16名）となっています。なお、付帯意見として《学校や担任の先生は人柄による》、《子どもの友達も条件付き》といった言葉が添えられた人もいました。

■「不登校のアンケート」に書かれてあった親の意見や思いをご紹介します。

・不登校はその子それぞれで、単純に一つのものとしてとらえるのには無理があると思う。ただ共通して考えられるのは子供たちが常に何らかのストレスを抱えて、のびのび育ちにくい社会（家庭も含めて）になっているからではないかと思う。

・子どもが不登校になったら、親の立場としてとても深刻であるから、やはり学校を第一に考えます。気楽に相談できる場が欲しいです。そして、不登校になる子どもがいても不思議ではないと思える環境づくりも必要だと思います。

・いつ、自分の子が学校へ行きたくないと言い出すか、不安で怖い。

・不登校が長くなればなるほど、登校しずらく、高校進学も困難で、将来に不安を感じる。

・不登校は特別でも何でもないけど、後ろめたさを感じるかもしれない。